

ミラーシステムの自他弁別特性についての研究

申, 甕敬

<https://hdl.handle.net/2324/7363892>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (感性学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名	申 夔 敬			
論 文 名	ミラーシステムの自他弁別特性についての研究			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	樋口重和
	副 査	九州大学	助教	Loh Ping Yeap
	副 査	国立精神・神経医療研究センター	室長	江頭優佳

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、自己感覚の基盤となる身体的自己の認識に関わる神経活動に着目し、自他弁別に関わる神経活動について脳波を使って検討するための実験プロトコルおよび解析手法を構築することを目指して実施された。具体的な目的として、自己と他者の区別がミラーシステムの活動指標である脳波にどのように反映されるかを明らかにし、自他表象に関わる脳活動指標としての有効性を大人と子どもで検証することであった。

第1実験で、成人を対象に自己と他者の動作を異なる二視点から観察する実験を行い、動作の自他弁別が脳波の **mu** 抑制に与える影響を視点の要因と共に検証が行われていた。次の第2実験では、第1実験の限界点を踏まえて実験プロトコルを改良し、再度成人を対象に実験を行った結果が示されていた。第3実験では、第2実験と同じプロトコルを基に子どもを対象とした実験を実施し、脳が発達段階にある子どもにおいて自他の区別が **mu** 抑制に与える影響について検証されていた。最後に、成人と子どもの結果を比較し、異なる発達段階において自他の区別が **mu** 抑制に及ぼす影響について検討されていた。

以上の実験から、ミラーシステム活動が自己と他者の区別に寄与する神経基盤であり、発達段階に応じた特性の存在についても考察されていた。本研究の意義として、自他弁別を反映する指標としての **mu** 抑制の有効性を初めて検証した点と、発達の観点からミラーシステム活動を包括的に理解するための知見を提供した点が挙げられ、感性科学分野において重要な知見を示したと言える。

最終試験

この論文について、論文調査委員会は、令和6年2月7日15時00分から大橋キャンパス512教室において、申夔敬氏及び論文調査委員全員の出席により、公開による論文の調査及び最終試験を実施した。

論文内容について、申夔敬氏は論文調査委員（全員）の質問に的確にかつ明確な回答を行い、また、口頭又は筆答により行われた関連の授業科目等に関する調査についても、論文調査委員を満足させる回答を行ったので、論文調査委員会は最終試験を合格と認定した。

以上のことから、論文調査委員会は、申夔敬氏が博士（感性学）の学位を授与されるのに相応しいと判断した。